

生きづらい世の中を楽に生きる

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 田中 宏



「^ち智に働けば角が立つ。^{じょう さお}情に掉させれば流される。意地を^{とお}通せば^{きゅうくつ}窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。(中略)人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。(中略)ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国に行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう」

夏目漱石氏が1906年(明治39年)に新小説に発表した「草枕」の冒頭に書かれた文章である。

とかく現代社会では「生きにくさ」がよく言われているが、どうやら現代に限ったことではなく、明治39年の世にも「生きにくさ」は存在していたことになる。

では「生きにくさ」の原因は何か。それは自分と現社会や人々が合わないことで生じることが多い。解決策は2つ考えられる。世の中や周りを自分に合わせるか、または自分がその社会に適応するかどちらかである。しかし、世の中が自分に合わせることは事実上不可能であり、前者を選択すれば常に生きにくさは感じるし、後者は周囲に迎合し、全てほどほどに生きなければならぬということになる。

にしても、「生きづらい」と感じる人もそうでない人も同じ世に生きていることも事実。

私が1994年(平成6年)の時、法律の勉強をしたいと思い、専門学校へ通っていた時期があった。日中は勉強し、夜は救急病院で夜勤のアル

バイトで生計と学費を賄い、自宅に帰るのは週3日程度の生活であった。今では社会に出てから再度キャリアアップのために学校へ行きなおすということは当たり前の時代であるが、当時はそれが珍しい時代でもあった。私の周囲の9割以上の人たちは「優雅だね〜。もう一度学生をやってみたいものだよ。君は恵まれているね〜」と皮肉を交えて言われたものだ。しかし、私は「生きにくい」と感じたことは一度もなかった。自分の目標に向かい精一杯生きていたから、周囲からの雑音は耳で聞こえていても私の心には届かなかった。それは自分の選択に強い信念があったからにほかならない。生きにくさを感じないもう一つの理由があった。普段から調和を大切にし、自分のことを理解してもらおう努力は欠かさなかったことであろう。2014年(平成26年)に社会人大学院に進学した時は、時代は変化しており、周囲からそのような皮肉を言われたことは一度もなかった。

時には自分を貫くということは自分の我を通すことになるが、普段から調和を大切にし、人とぶつからずに生きる。しかし、ここぞという場面では、自分の信念に基づいてやり遂げることが必要だ。

自分が通したい信念があるのなら、「理解してくれない」ではなく「理解してもらおう」姿勢が大切なのだ。